

戀愛學校

渡辺淳一



渡辺淳一

恋愛学校

一九九二年四月八日 第一刷発行

著者 渡辺淳一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一―一五〇

編集部 (〇三三) 三三三〇―六三三〇

電話 販売部 (〇三三) 三三三〇―六三三三

製作課 (〇三三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1992 J.Watanabe Printed in Japan
ISBN4-08-780164-0 C0095

恋
愛
学
校

目 次

Lesson 1

- 愛の嵐 THE NIGHT PORTER……………5
——肉体に刻みこまれた愛の深さ

Lesson 2

- 愛と哀しみの果て OUT OF AFRICA……………23
——夫としてより恋人に向いた男

Lesson 3

- 恋におちて FALLING IN LOVE……………43
——妻子ある男と人妻との愛

Lesson 4

- 危険な情事 FATAL ATTRACTION……………61
——愛が憎しみから狂気へ変わる時

Lesson 5

- 夏の嵐 SENSO……………81
——男を追いつぎた年上の女の悲劇

Lesson 6

- うたかたの恋 MAYERLING……………101
——美しき心中の陰に秘められたもの

Lesson 7

- 情婦マノン Manon……………119
——悪女に惹かれる男の純愛

Lesson 8

- 終 着 駅 Terminal Station.....137
——妻が夫以外の男に揺れる時

Lesson 9

- ローマの休日・Roman Holiday.....153
——夢であるが故に軽く爽やかな恋

Lesson 10

- 風と共に去りぬ・GONE WITH THE WIND.....169
——ボタンのかけ違いで終わった恋

Lesson 11

- 情 事 L'Aventura.....187
——愛の不毛の行きつく果て

Lesson 12

- 昼 顔 Belle de Jour.....205
——女性のなかに潜む娼婦願望

Lesson 13

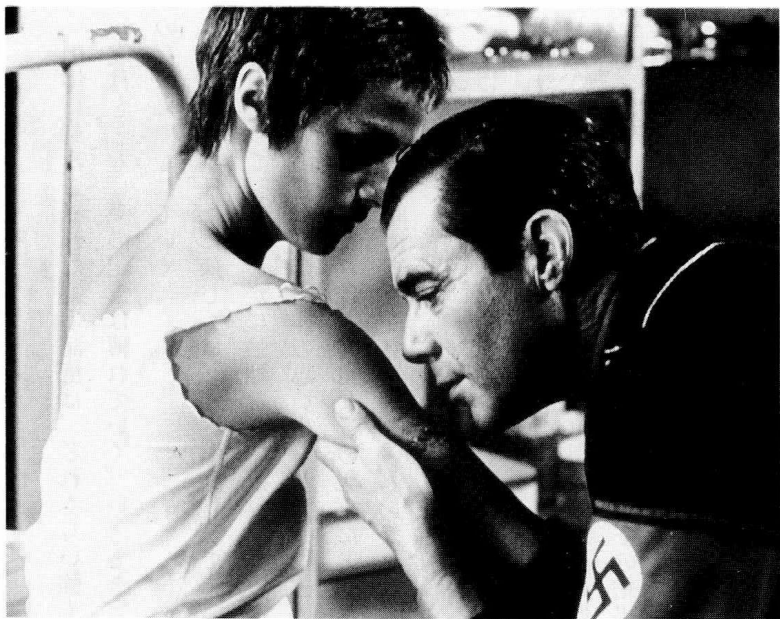
- カサブランカ・CASABLANCA.....221
——男の甘さとダンディズム

Lesson 14

- 旅 情 SUMMERTIME.....241
——キャリアウーマンのひと夏の恋

- あとがき.....258

装 幀／青木澄江
オブジェ製作／藤掛正邦



Lesson 1

愛の嵐 THE NIGHT PORTER
——肉体に刻みこまれた愛の深さ——

肉体に刻みこまれた愛の記憶は、どれくらい強く、たしかなものだろうか。

歳月とともに愛の記憶は薄れていく。いつとき、忘れ難いと信じた思い出も、やがて時間という流れのなかに埋もれていく。

「去るものは日々に疎し」は、まさしく現実である。

だがかつて、軀のなかに強烈な愛の感覚を刻みこまれたとしたら……。

心の思い出でなく、肉体の思い出として、過去の記憶が息づいていたら。それも尋常な行為でなく、ある異常な状況下における異常な愛の記憶としたら。

その愛は再び回復しうるだろうか。そしてもし回復したとしたら、その愛はどのような経過をたどるのであろうか。

愛において、精神と肉体と、いずれが優位を占めるのか、そして肉体の感覚だけで愛が生まれ、さらにそれで愛が甦ることがありうるのか。

『愛の嵐』は、この肉体と精神の亀裂の不思議さ妖しさを追い求めた映画である。

「愛は精神的なもので、肉体の結びつきはその結果にすぎない」と思っている人々に、この映画は強烈な印象を与えるに違いない。

ときは一九五七年、第二次大戦が終わって十二年たった初冬のウィーンで、ある男と女が偶然、再会

する。男はマックス（ダーク・ボガード）。かつてナチスの親衛隊幹部としてユダヤ人収容所で、絶大な権力をふるっていた。

だがいまは厳しいナチス残党追及の目を逃れて、ウィーンの小さなホテル「オペル」のフロント係として、ひっそりと生きている。

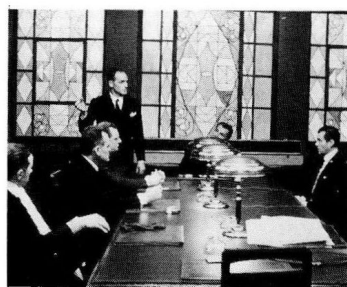
ここにある日、ルチア（シャーロット・ランプリング）という美しい女性が現れる。

ルチアはユダヤ人で、かつて第二次大戦中、ナチスに捕らえられ、収容所に送られて死を待つばかりの運命にあった。

だがルチア美貌に目をつけたマックスに助けられ、九死に一生を得る。



1 ユダヤ人の美少女ルチアは収容所時代マックスに愛され、命を救われる



2 元ナチス親衛隊員たちは収容所時代の生き証人ルチアを殺そうと密議を開く



3 10数年後再会。激しく求め合う二人は人目を逃れてアパートに閉じこもる

しかしその実態は、親衛隊員達の前で全裸にされ、男達の卑猥な目にさらされたうえ、マックスの愛人として仕えるという、苛酷な運命を甘受しなければならなかった。

むしろそれはルチアが望んだことではなく、権力者の一方的な強制で、まだ少女であったルチアに逆らう方法はなかった。

戦争が終わった後、ルチアは釈放され、その後、オーケストラの指揮者と結婚し、平穏な生活を送っている。

だが運命は、皮肉なめぐり合わせを演出する。

たまたま夫がウィーンの国立劇場で、モーツアルトのオペラ『魔笛』の指揮をすることになり、ルチアはマックスが勤めているホテルに泊まることになる。

夫とともに気なくホテルに入ってフロントを見た途端、ルチアはわが目を疑い、蒼ざめる。

それはマックスも同様であった。いまは過去を隠してひそかに生きているのに、その過去のすべてを知っている生き証人である女が現れたのである。しかも二人のあいだには深い絆の結びつきがあった。

一瞬のうちに、収容所時代の悪夢が甦ったルチアは精気を失い、直ちにホテルを出たいと夫に訴える。一方のマックスは、自分の過去をルチアに密告されるのではないかと怯える。

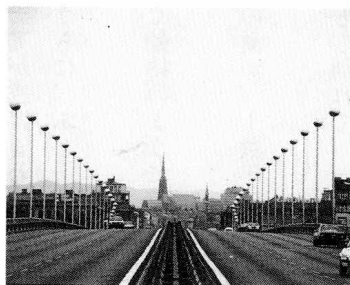
このころ、マックスはかつてのナチスの同僚、クラウス（フィリップ・ルロワ）、ハンス（ガブリエレ・フルゼツティ）等と連絡を取り合いながら、自分達の過去を知っているユダヤ人達を抹殺する組織にくわわっていた。



4 食料もなくなり電気のコードも切られた暗闇の中で、破滅的な愛を重ねる日々



5 もはやこれまでと覚悟を決めた二人は収容所時代の衣裳を着け死出の旅に出る



6 ドナウにかかる橋の上で車を捨て、手を取り合って駆ける二人に銃声が響いて

たがいに運命のめぐり合わせに驚き、怯えながら一夜が明ける。
ルチアは夫に、ウィーンから立ち去りたいと訴えるが、仕事に忙しい夫はルチアをなだめて、単身、次の公演地であるフランクフルトへ飛び立つ。
一人、ホテルに残されて悪夢を思い出すルチアと、階下のフロントで疑心暗鬼のまま息を潜めるマックス。

やがて不安に耐えきれなくなったマックスは階段を忍ぶように上がり、ルチアの部屋をノックする。
おそろおそろルチアがドアを明けた途端、マックスが飛びこんでくる。
「何故、ここへきたんだ」

絶叫とともに、マックスはルチアに殴りかかり、悲鳴をあげながらルチアが逃げまわる。

ようやくルチアをとらえたマックスは床に組み敷き、激しく揉み合ううちに、ふと十数年前の驕の結びつきが甦る。

争っていたはずの二人はその瞬間から過去の世界に引き戻され、激しく動物のように求め合う。

不思議な快樂であった。

かつて収容所時代、抑圧する者とされる者とのあいだで生まれた倒錯の愛が、十数年の空白をうずめて甦ってくる。

そのまま、二人は狂ったように求め合い、ルチアはアメリカへ帰る夫とも別れて、一人ウィーンに残ることになる。

マックスもルチアにのめり込み、ホテルから自分の部屋に連れこんで、逃げないように鎖でつなぎ、勤めに出るといふ日々をくり返す。

まさに異常で狂的な愛だが、それは長続きはしない。

クラウス、ハンス等、かつての同僚達は、マックスがルチアを囲っていることを知り、ルチアを差し出すように求める。

彼等にとって、ルチアは自分達の過去の罪状を知っている危険な生き証人である。

マックスは必死に弁明する。ルチアは自分を愛し、われわれの過去をあばくような女ではないと。

だが復讐の幻影に怯える彼等は納得せず、過去を守りたいなら、女と別れると迫る。

追いつめられたマックスは仕事にも行かず、ルチアと二人きりで部屋に閉じこもり、ひたすら出口のない愛欲にふける。

いうことをきかぬマックスに危険を感じた昔の同僚達は、二人が潜んでいるマンションを囲み、命まで狙いはじめる。

絶望的な状況に追いこまれたマックスとルチアは、食物もなく、電気のコードも切られた暗黒のなかで、さらに破滅的な愛を重ねる。

だがそれにも限界がくる。

このままでは閉ざされた部屋で死を待つだけである。覚悟を決めたマックスは、十数年ぶりに隠してあったナチス親衛隊の制服を身につけ、ルチアはかつて収容所時代に着せられていたのとそっくりのワンピースに身をつつみ、深夜、ひそかにアパートを抜け出して車に乗る。

しかし、どこといって行く当てはない。

かつて二人の愛が芽生えたときと同じ姿に戻って、走れるだけ走って息絶える情死行である。

だが二人が力尽きる前に、以前の同僚達が車で追ってくる。

もはや逃げられぬと知ったマックスとルチアは、ドナウにかかる橋の上で車を捨て、手を取り合って駆けだす。

だがそれも長くは続かず、白みかけた橋の上に非情な銃声が響き、それとともに二人は重なり合うように倒れ、その上に、新しい一日を約束する朝の光が静かにふり注ぐ。

愛には美しい出会いが必要である。汚れた出会いから美しい愛が生まれることはない、という人がいる。

だがはたしてそうだろうか。

出会いということからいえば、この映画のマックスとルチアほど、汚れた醜い出会いはない。

一方はユダヤ人をみな殺しにする使令を担い、それを冷酷に実行してきたナチスの親衛隊員であり、一方は、収容所に捕らえられ、死を待つだけのユダヤ人少女である。

そこには、人間としてもつべき博愛や誠実のかけらもない。一方は機械のような正確さでユダヤ人をガス室に送っていく冷血漢であり、一方は殺されていくのを待つだけのユダヤ人である。

これほど非人間的で絶望的な関係はない。

だがこの二人のあいだに愛が芽生えた。

最も醜く卑劣と思われる関係から、愛が生まれたのである。

もちろん、その経過は一般の愛のように、微笑ましく祝福されるべきものではなかった。

初め、男は権力で女をおさえ込み、強引に奪う。女は恐怖に蒼ざめ、怯えたまま男を受け入れる。そこには、愛と名づけるべきものはなにもない。

しかしそこから、結果として、死をともしても悔いしないほどの愛が生まれた。

二人の関係は「美しい出会いが、美しい愛を育む」などという、きれいごとでは説明がつかない。

出会いなど、いかに醜く非人間的でも、肉体の結びつきを重ねるうちに、なにものにも負けぬ強い愛が生まれることがある。

このような愛を信じない人は多いかもしれない。とくにプラトニックな愛を好む若い女性は、不潔で嫌らしいだけと、顔をそむけるだろう。

だがこの映画の魅力は、そうした見せかけのきれいごとを、初めから否定しているところにある。常識的な優しさや甘さを拒否した先で、「愛とはなにか」「人間とはなにか」を考えようとしているのである。

この常識の否定は、二人の愛が高まる過程ではつきりと描かれている。

かつてルチアは死の恐怖のなかで、有無をいわさず身を奪われた。それはまさしく加害者と被害者の関係であり、奪われたルチアにとっては、終生忘れえぬ屈辱であった。

だがこの関係が、途中から微妙に変わってくる。加害者であったマックスがルチアを好ましく、貴重なものと思いはじめたときから、立場が逆転してくる。

収容されたユダヤ人の証しとして、ルチアは焼きゴテで肩に印を刻まれる。その傷痕に、刻印を捺させたはずのマックスが接吻をする。

このころ、マックスはまだ自分がルチアを愛しているとは気づいていない。ただ自分の意のままになる玩弄物ぐらいにしか思っていないかった。

だがマックスの心の中には、ひそかにルチアへの愛が育ちはじめていた。

このあと、マックスはさらにルチアに傾斜し、倒錯の愛にのめり込んでいく。

美しいルチアの肉体を思いどおりに奪いながら、ときに奔放な肢体をとらせ、それをうつりと眺める。さらには美しい足許にひれ伏し、接吻をする。

この愛の形は、サディスティックであるとともにマゾヒスティックでもある。初めは加害者であったものが、途中から被害者になり、やがていずれともわからぬ妖しい感覚の中にうずもれていく。

一方のルチアも、初めはひたすら権力者であるマックスを恐れ、おののいていた。あきらかに自分は被害者で、相手は圧倒的な加害者であると思ひこんでいた。

だがやがて、その関係が微妙に変わりはじめていくことに気がつく。

初めは一方的に奪っていたマックスが、途中から優しくなり、やがて自分の肢体を仰ぎ、憧れの眼差して眺めるようになる。さらには跪ひざまずき下僕のようにかしづく。

たとえそれがマックスの性癖だとしても、そうした行為を見るうちに、自分がマックスにとってかけがえない、大切な存在であることに気がついてくる。

改めて考えると、マックスは命の恩人であった。本来なら他のユダヤ人とともにガス室に送られて死んでいたものを、マックスが目をかけてくれたおかげで助かったのである。

残っているユダヤ人のすべてが飢えと苛酷な労働で痩せ衰えているのに、自分一人充分な食事を与えられ、安逸な生活をむさぼっている。

同じ仲間の苦難を思うと息苦しくなるが、生きていけるという喜びはなにもものにも替えがたい。